

大学の世界展開力強化事業(平成29年度選定) 東京工業大学 取組概要

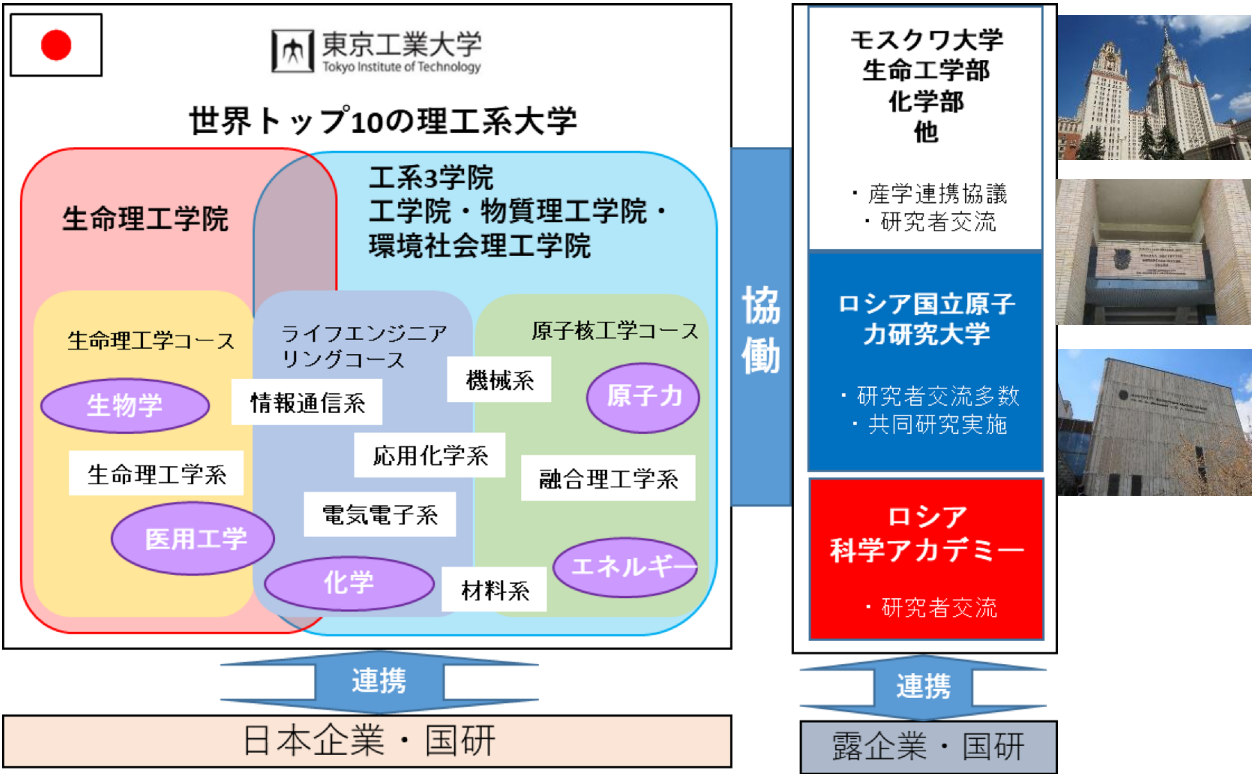
※独立行政法人日本学術振興会により公表されている内容は[こちら](#)です。

【事業の名称】(選定年度29年度・タイプA(ロシア))

健康・医療産業や原子力・エネルギー産業を先導する日露工学系人材育成プログラム

【事業の概要】

生命工学, 医用工学, 環境科学, 原子核工学分野における日露間の産業発展に寄与できる若手技術系人材の育成を, 東工大とロシアのモスクワ大学、ロシア国立原子力研究大学などが共同で実施することで、健康・医療産業や原子力・エネルギー産業をグローバルに先導できる研究者・技術者を輩出する



【交流プログラムの概要】

本交流プログラムでは、これまでの日露大学間の交流を活用し、東京工業大学の学部学生・大学院生を短期あるいは長期でロシアの大学に派遣する交流プログラム、モスクワ大学やロシア国立原子力研究大学の学部学生や大学院生を短期あるいは長期東工大で受け入れる交流プログラム、そしてこれらの派遣受入学生だけでなく多くの日露学生が参加できる学生交流フォーラムを実施することで、日露学生の工学分野での学術交流を活性化します。

【本事業で養成する人材像】

本事業を通じて、①日露の健康・医療産業や原子力・エネルギー産業に大きく寄与し、将来世界を舞台にグローバルに活躍できる指導的な研究者・技術者、②国際性、社会性、コミュニケーション力を身に付け、日本とロシアの間の架け橋となり、さらに世界の他の国々とも協力関係を構築することができる人材、③最先端の工学系分野の高度な専門知識、技能、経験を有し、国際的なリーダーシップを発揮できる高度技術系人材、を養成する。

【本事業の特徴】

本事業は、東京工業大学の融合研究教育分野である複合系ライフエンジニアリングコースと原子核工学コース、そして生命の理工学を推進する生命理工学コースの3コースが中心となって連携し、これらの融合理工系分野のロシアトップ2大学等との学生交流を通じ、日露大学間の学術交流を積極的に推進するとともに、日露間で今後発展が期待される産業展開に寄与できる若手技術系人材の育成を両国で実施することが特徴である。

【交流予定人数】

	H29	H30	H31	H32	H33
学生の派遣	10	15	15	15	15
学生の受入	10	15	15	15	15

1. 取組内容の進捗状況(平成29年度)

【東京工業大学】

【事業の名称】(選定年度29年度・タイプA(ロシア))

健康・医療産業や原子力・エネルギー産業を先導する日露工学系人材育成プログラム

■ 交流プログラムの実施状況



〈 第1回日露学生交流フォーラム 〉

平成29年度は計画通りにプログラムを順調に実施した。事業初年度に当たり相手大学であるモスクワ大学(MSU)並びにロシア国立原子力研究大学(MEPHI)と本事業の目的と事業実施のための連携について十分すり合わせ論議を行い、その連携体制のもと、充実した本学学生のMSUとMEPHIへの短期(2週間)派遣、並びにMSU並びにMEPHI学生の本学への短期(2週間)受入を実施することができた。加えて本学とMSU並びにMEPHIの学生・教員参加による第一回日露学生交流フォーラムを開催し、教員による研究内容紹介や学生によるポスターセッションでは非常に活発な議論がなされ、参加したMSU、MEPHI全教員から「相互の研究内容を詳しく聞けてとても有意義であった」とのコメントがあった。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

平成29年12月3日～15日に本学生命理工学コース並びにライフエンジニアリングコースの学生計8名のMSU化学科並びに生物工学科への派遣を実施した。また平成30年2月12日～23日に原子核工学コースの学生3名のMEPHI原子核物理・工学研究所への派遣を実施した。

○ 外国人学生の受入

平成30年3月5日～18日にMEPHI原子核物理・工学研究所の学生計4名、さらに3月8日～21日にMSU化学科並びに生物工学科の学生計7名の本学への短期受入を実施した。

	H29	
	計画	実績
学生の派遣	10	11
学生の受入	10	11

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

○ 交流プログラムの質の保証について

日露両学生とも選抜に当たり、能力評価としてGPA(Grade Point Average)を考慮し、また語学力ではTOEIC750点以上を目安とするともに、研究関連の交流を目的としているため学生にはオーラルプレゼンとポスタープレゼンを課した。また交流プログラムの内容の質そのものについても日露両教員間で双方の意見交換を行い、プログラム内容に反映させている。



〈 PBL型グループ研修 〉

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

○ 外国人学生受入のための環境整備

受入学生の各種手続きは本プログラム事務室で一元的に実施し、訪日に関する個々の学生からの質問等にも直接対応するなどの受入のための環境整備を行った。また実際の受入に当たっては受入期間中、専任教員やサポート学生をつけることにより交流学生が効果的にプログラム専念できるようにした。

○ 日本人学生派遣のための環境整備

派遣に必要な手続きを専任教員と事務支援員が行い、円滑な派遣が実施された。さらに派遣学生には、専任教員による事前説明会を実施するとともに、引率することにより学生はプログラム内容に集中できた。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

○ 事業の実施に伴う大学の国際化

研究発表会、ワークショップ型グループ研修等、実施されたプログラムには派遣・受入の学生のみならず、日露両大学の他の学生が参加するプログラムが多くあったため、より波及効果の高い国際交流の促進に寄与した。

○ 国内外への情報提供の方法・体制

本事業のウェブサイト(日、英、露)を構築し、海外から必要情報が明確に得られるサイトとした。また本事業の日露学生向け募集パンフレット(日、露)を作成し、今後募集・広報向けに活用していく予定。

■ ゲッドプラクティス等

○ 日露学生フォーラムの開催

相手方教員の参加により彼らに対し、本事業への高い参画意識をもたらしることができた。また参加全大学メンバーが一同に会する機会となり一体感の醸成に寄与した。さらに本フォーラムに付随して相手大学教員とのFace to faceの打ちあわせを行うことで、実施内容の評価と今後の方針に関する深い論議が実施できた。

○ 民間企業、外部団体への学生訪問

ロシアでは、Rosatom社、Ajinomoto-Genetika Research Institute社を、日本では横浜市立大学医学部や味の素(株)研究所、日本原子力研究開発機構大洗研究センター訪問を実施し、多面的知識の吸収に寄与した。

2. 取組内容の進捗状況(平成30年度)

【東京工業大学】

【事業の名称】健康・医療産業や原子力・エネルギー産業を先導する日露工学系人材育成プログラム
(選定年度29年度・タイプA(ロシア))

■ 交流プログラムの実施状況



〈第1回 バイオトーナメント集合写真〉

H30年度は2年目となり本学、モスクワ大学(MSU)並びにロシア国立原子力研究大学(MEPHI)の本事業運営体制が整い、担当教員間の密な打合せ・連携を行った結果、本事業の実施内容に関してH29年度活動を踏まえながら、さらに効果的なプログラムを検討・設定し、実施することができた。

短期派遣・受入では、全てのワークショップ型検討会やトーナメント型討論会は、ロシア学生と本学学生の混成グループで参加させることにより、学生間交流が極めて活発に行われる結果となった。また長期派遣・受入では、学生本人が希望する派遣先大学研究室に配属し、じっくり研究に取り組むことで、日本とロシアの研究アプローチの違い等を学ぶとともに、学生が積極的に関与した結果、学術論文投稿や学会発表につながる実際の学術研究成果が得られた。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

本学生命理工学コース並びにライフエンジニアリングコース学生のMSU派遣(短期 8名、9/16～29、長期 2名、9/18～12/15)、並びに本学原子核工学コース学生のMEPHI派遣(短期 4名 9/16～29、長期 1名、9/16～12/12)を実施した。

○ 外国人学生の受入

MSU化学科、生物工学科、生命情報学科学生の本学受入(短期 8名、2/12～24、長期 2名10/5～2/16、23)、並びにMEPHI原子力物理工学研究所学生の本学受入(短期 4名、3/5～20、長期 1名、12/13～3/26)を実施した。

	H30	
	計画	実績
学生の派遣	15	15
学生の受入	15	15

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

○ 交流プログラムの質の保証について

日露両学生とも能力評価としてGPA(Grade Point Average)を考慮し、また語学力ではTOEIC750点以上を目安とし、単なる体験ではなく、実際の研究交流を可能とする学生選抜を行っている。長期交流では研究内容の事前すり合わせを行って実施し、学術的成果創出につなげることができた。また短期にあっても学生には自らの研究内容のオールラウンドな発表を課し、グループ論議では常に日露学生の混成チームとし、また個別研究室配属による実験・実習を行うなど、交流の活発化を図り、能動的活動を促すことができたことから、質の高い交流プログラムとなった。



〈グループワークショップ研修論議〉

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

○外国人学生受入のための環境整備

受入学生の各種手続きは本プログラム事務室で一元的に実施し、各学生からの質問等にも直接対応した。実際の受入では、受入期間中専任教職員やサポート学生を配置することにより交流学生はプログラム活動に専念できた。また海外旅行保険の加入を推奨するとともに長期学生受入に当たっては、学研災・学研陪(災害傷害賠償保険)に加入させた。

○日本人学生派遣のための環境整備

各種派遣手続き等を専任教員と事務支援員が行い、円滑な派遣が実施された。特に安全衛生面については、派遣前に学生への説明(ロシアの治安状況と行動留意点、たびレジへの登録、緊急時の連絡先(領事館等)への通報等)とともに、海外旅行保険、アイラックサポートへの加入を義務づけた。また短期・長期学生派遣時期をなるべく同時期とし、ロシア滞在経験を有する専任教員が引率することで現地における生活指導も行った。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

本事業のウェブサイト(日、英、露)にて事業活動状況の情報を外部に公表している。今年度は、本事業並びに「第1回国際バイオトーナメント」がそれぞれ在露日本大使館の「ロシアにおける日本年の行事」に認定された。特に第1回バイオトーナメントは本学が初の外国参加大学となり、MSU以外のロシア参加大学や後援するロシア連邦交流庁、現地協賛企業に対して本事業による学生交流を認知させることができた。またロシア外務省・連邦交流庁主催の国際フォーラム(10/18、於:在日ロシア大使館)に招待され、本事業活動成果の講演を行う等、本事業の外部認知を進めた。

■ グッドプラクティス等

①毎年開催される全露大学学生討論会「バイオトーナメント」において、MSUが本学との連携に鑑み、今年度は本学学生参加の「第1回国際バイオトーナメント」(英語による討論会)を企画実施した。本学学生はMSU学生と3つの混成チームで参加。事前準備でMSU学生との相当量の論議が行われ、日本学生参加1チームが見事3位入賞を果たした。

②今年度開始の長期派遣・受入では、各学生が研究室でじっくりテーマに集中して取り組んだ。その結果として、MEPHI派遣の本学学生は派遣中に高い研究結果を出し、それをロシアの学会“The 14th International Scientific and Practical Conference”で発表、優秀賞(第2位)の表彰を受けた。またMEPHIからの受入学生は、“日本原子力学会 春の大会”にて口頭・ポスターの両発表を実施した。さらにMSUからの受入学生1名は、高い研究成果を創出し、その結果については本学との共著論文として査読付き学術雑誌へ投稿した。

3. 取組内容の進捗状況(令和元年度)

【東京工業大学】

【事業の名称】健康・医療産業や原子力・エネルギー産業を先導する日露工学系人材育成プログラム
(選定年度29年度・タイプA(ロシア))

■ 交流プログラムの実施状況



〈 研修成果報告会 〉

令和元年度は、過去2年間の活動を踏まえ、本学、モスクワ大学(MSU)並びにロシア国立原子力研究大学(MEPHI)の教員間で密な打合せを行い、より効果的なプログラムを検討・設定し、実施することができた。

短期派遣・受入では、ワークショップ型検討会やトーナメント型討論会において、全てロシアの学生と本学学生の混成グループで参加させるとともに、今年度から長期受入と同様に、MSU学生の短期受入においても学生の個別研究室配属による研究実習を行わせ、修学効果並びに学生交流効果を高めた。さらに長期派遣・受入では、学生の研究に関連したテーマを設定し、日本とロシアの研究アプローチの違い等を学ぶとともに、じっくり研究に取り組むことで、研究能力の向上に繋がった。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

生命理工学コース並びにライフエンジニアリングコース学生のMSU派遣(短期 8名、9/15～28、長期 2名、各9/3～11/29、9/8～11/22)、並びに原子核工学コース学生のMEPHI派遣(短期 4名、9/8～22、長期 1名、11/29～2/19)を実施した。

○ 外国人学生の受入

MSU化学部、生命工学部、生命情報工学部学生の受入(短期 8名、2/10～23、長期 2名、各10/4～12/27、～1/22)、並びにMEPHI原子力物理工学研究所学生の受入(短期 4名、2/13～28、長期 1名、12/5～3/4)を実施した。

	R1	
	計画	実績
学生の派遣	15	15
学生の受入	15	15

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

○ 交流プログラムの質の保証について

日露両学生とも能力評価としてGPA(Grade Point Average)を考慮、また語学力ではTOEIC750点以上を目安として、単なる体験ではなく、実際の研究交流を可能とする学生選抜を行っている。長期交流では研究内容の事前すり合わせを行い、学術的成果創出につなげている。また短期にあっても学生には自らの研究内容のオーラルやポスターによる発表を課し、日露学生の混成チームによるグループ論議、個別研究室配属による実験・実習などで交流の活発化を図り、能動的活動を促している。



〈 学生ポスター発表会 〉

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

○ 外国人学生受入のための環境整備

受入学生の各種手続きは本プログラム事務室で一元的に実施し、各学生からの質問等にも直接対応した。受入期間中に専任教職員やサポート学生を配置した結果、交流学生はよりプログラム活動に専念できたようだ。また海外旅行保険の加入を推奨するとともに受入学生全員に学研災・学研陪(災害傷害賠償保険)の加入を義務づけた。

○ 日本人学生派遣のための環境整備

派遣手続き等は専任教員と事務支援員が行い、円滑な派遣が実施された。特に安全衛生面については、学生への事前説明(ロシアの治安状況と行動留意点、たびレジへの登録、緊急時の連絡法<領事館等への通報>等)を実施し、海外旅行保険、アイラック社の「安心サポート」への加入を義務づけた。また短期・長期派遣時期をなるべく同時期とし、ロシア滞在経験を有する専任教員が引率することで現地における生活指導も行った。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

本事業のウェブサイト(<http://www.iuep-russia.titech.ac.jp/>)にて、日、英、露の3か国語による事業活動状況の情報公開を行っている。また、昨年度の長期受入学生1名の研究内容を学術雑誌(Biochemie)に投稿し、今年度掲載(Vol. 170,p49-56)された。さらにもう1名の長期受入学生による“日本原子力学会・春の大会”での講演発表が計画され、学会はCOVID-19により中止となったが、各々の学術雑誌と学会の予稿集にはその謝辞に、「本事業によるサポート」が明記され、成果が外部発信された。

■ グッドプラクティス等

・本事業による学生交流実績をベースとして、①MSUと本学の全学協定が締結された(2019年9月24日)

②MEPHIの原子力物理工学研究所とともに、日本政府とロシア政府による共同研究プログラム「国際協力型廃炉研究プログラム」が採択・開始された③ロシア・CISからの学生を含む、文科省の国費留学生受入プログラムが採択された。

・毎年開催される全露大学学生討論会「バイオトーナメント」において、昨年度と同様に本学学生はMSU学生と3つの混成チームで「第2回国際バイオトーナメント」(英語による討論会)に参加し、うち1チームが見事2位入賞を果たし、また1名の本学学生が個人賞を受賞した。

4. 取組内容の進捗状況(令和2年度)

【東京工業大学】

【事業の名称】健康・医療産業や原子力・エネルギー産業を先導する日露工学系人材育成プログラム
(選定年度29年度・タイプA(ロシア))

■ 交流プログラムの実施状況



〈第4回フォーラムの集合スライド〉

例年、相手先大学であるモスクワ大学(MSU)及びロシア国立原子力研究大学(MEPHI)と本学との派遣・受入による学生交流、並びに交流プログラムに参加した学生のみならず、開催大学の日露の学生と教員が参加して研究内容の理解、論議を通じた相互交流を行う「日露学生交流フォーラム」(年1回モスクワと東京で交互に開催)を実施している。令和2年度は、新型コロナ禍の影響により渡航を伴う交流ができなかったため、代替活動として「日露学生交流フォーラム」をオンラインシステムを利用して3回(通算第4回、第5回、第6回)実施した。その他、MSU教員を講師とする特別講義、過去の長期派遣・受入学生の派遣先教員による継続的研究教育指導をオンラインで実施した。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

MSUへの派遣(短期8名、長期2名)、MEPHIへの派遣(短期4名、長期1名)を予定していたが、フォーラム参加で代替した。MSU派遣枠で14名、MEPHI派遣枠で6名、計20名が参加した(いずれも単位取得または修了証受領)。

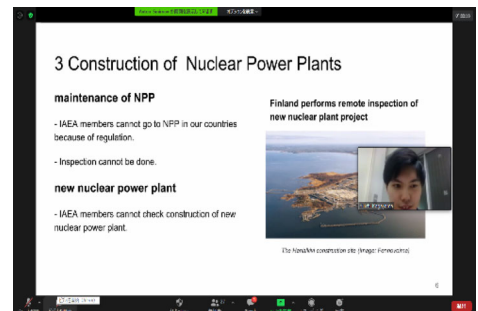
○ 外国人学生の受入

MSUからの受入(短期8名、長期2名)、MEPHIからの受入(短期4名、長期1名)を予定していたが、フォーラム参加で代替した。MSU受入枠で13名、MEPHI受入枠で6名、計19名が参加した(修了証受領)。

	R2	
	計画	実績
学生の派遣	15	20
学生の受入	15	19

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

MSU及びMEPHIの連携教員との打合せにより、渡航による交流の代替活動(オンラインによる3回の日露学生交流フォーラム)以外に、さらに効果的な大学間の交流連携活動を継続させていくことを目的として①オンライン特別講義の実施 ②過去の参加学生への研究教育指導の継続実施 ③共同研究推進 ④文科省に採択された国費留学生受入プログラムの学生募集連携等に関して協議をし、具体的活動を行った。



〈第5回フォーラム学生発表〉

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

結果として渡航を伴う学生の派遣・受入活動は中止したが、既に決定されていた受入学生の学内申請、在留資格証明交付申請、奨学金申請等、必要なすべての手続き、並びにMSUやMEPHIとの日常的な連絡対応も本事業事務室の一元管理のもと実施しており、環境整備は整っている。また本事業に関連して、本学が採択された国費留学生受入プログラム「バイオ産業や環境産業等の中核となるグローバルエコシステムを担う技術系人材育成プログラム」の学生募集も本事務室が窓口となり初期対応を実施し、MSUから学生3名の応募につながり、2名が合格した(令和3年9月訪日、入学予定)。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

本事業のウェブサイト(<http://www.iuep-russia.titech.ac.jp/>)にて、日、英、露の3か国語による事業活動状況の情報公開を随時行っている。研究教育指導の成果は、学会や学術雑誌への発表により内容の公開と普及に努めている。特に今年度は、本学先導原子力研究所の主催で令和2年12月に開催された「東京工業大学原子力エネルギー高度人材育成フォーラム(マサチューセッツ工科大学、ウィスコンシン大学等が参加、同時通訳有)」において、過去にMEPHIへ派遣された学生・卒業生が登壇してプログラムを通じたロシア学生との交流を中心に発表し、本事業活動の対外発信の良い機会となった。

■ グッドプラクティス等

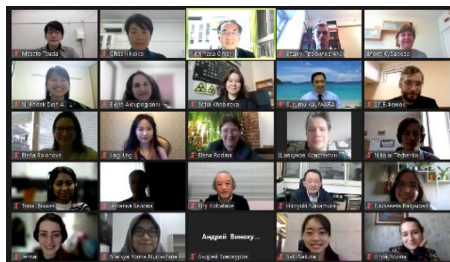
長期交流学生への派遣先教員による継続的な研究教育指導により、着実な研究教育効果を生み出している。MEPHI学生は、今年度2つの学術雑誌(Nuclear Energy and Technology 第6巻、p.155、2020年及びScientific Visualization 第12巻、p.100、2020年)に、本学とMEPHI両学生を共著者とする論文が掲載された。本学の原子核工学分野の学生は第41回日本核物質管理学会年次大会(令和2年11月)において研究成果をMEPHIとの共著で発表し、謝辞に本事業の貢献を示した。さらに本学の生命系分野でMSUとロシア科学アカデミー研究所に派遣された学生は、ロシア指導教員と査読付き学術誌である“Molecules”(第26巻、p. 1321、2021年)に共著論文として投稿し掲載され、質の高い研究成果を創出すると共に、対外発表ができた。このように参加学生への継続的な研究教育指導により、優れた教育効果を生み出し、相手先大学研究室との継続的かつ有機的に連携する枠組みが形成されている。さらに成果の情報公開による社会的普及にも貢献できた。

5. 取組内容の進捗状況(令和3年度)

【東京工業大学】

【事業の名称】健康・医療産業や原子力・エネルギー産業を先導する日露工学系人材育成プログラム
(選定年度29年度・タイプA(ロシア))

■ 交流プログラムの実施状況



〈第7回フォーラムの集合スライド〉

モスクワ大学(MSU)並びにロシア国立原子力研究大学(MEPHI)と本学との短期および長期の学生派遣・受入による学生交流、並びに派遣・受入学生のみならず日露の学生及び教員が参加し、研究内容の理解や論議を通じた相互交流を行う「日露学生交流フォーラム」(年1回、モスクワと東京で交互に開催)を例年実施している。しかしながら令和3年度は令和2年度に引き続き、新型コロナ禍の影響により、学生の渡航による交流ができなかったため、代替活動として通常年1回開催される「日露学生交流フォーラム」を、オンラインシステムを利用して2回(通算第7、第8回)実施した。また、オンラインによるMSU教員を講師とする特別講義、過去の長期派遣・受入学生の派遣先教員による継続的研究教育指導を実施した。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

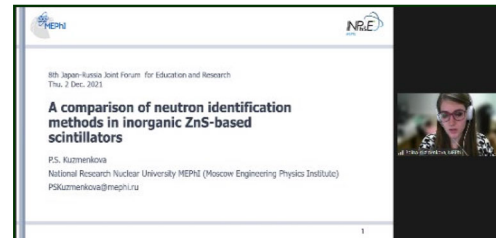
MSU(短期 8名、長期 2名)、MEPHI(短期 4名、長期 1名)への派遣を予定していたが、渡航ができなかったため、オンラインフォーラムへの参加、並びにMSU教員による特別講義の聴講で代替し、MSUへの派遣枠16名、MEPHIへの派遣枠5名の計21名が参加した。(いずれも単位取得 or 修了証受領学生人数)

○ 外国人学生の受入中止となった昨年度分と合わせ、例年の計画数の倍の学生受入、すなわちMSUから(短期 16名、長期 4名)、MEPHIから(短期 8名、長期 2名)を予定し、学生を決定、学内受入手続きを開始したが、コロナ禍が収束せず断念した。その代替活動として、オンラインフォーラムを開催し、MSUからの受入枠12名、MEPHIからの受入枠5名の計17名が参加した。(いずれも単位取得 or 修了証受領学生人数)

	R3	
	計画	実績
学生の派遣	15	21
学生の受入	15	17

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

MSU、MEPHIの連携教員との打合せにより、本来計画していた渡航による交流の代替活動とした2回にわたるオンラインの日露学生交流フォーラム、特別講義の実施以外に、①過去の参加学生の研究教育活動の継続的实施、②共同研究推進、③国費留学生受入プログラムにおけるMSU学生の連携した募集を行った。さらに国際化の目標の一つであるダブルディグリープログラムに向けて、MSU、MEPHIと今後の研究教育の共同指導プログラム(コチュテルプログラム)の検討を進めた。



〈第8回フォーラム学術講演〉

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

新型コロナウイルス感染が収束しなかったことから、結果として実渡航を伴う学生の派遣・受入活動は中止したが、既に決定されていた受入学生の学内申請手続きやビザ、航空券の手配、並びにMSUやMEPHIとの連絡対応も本プログラム事務室の一元的管理のもと実施しており、環境整備は整っている。また派遣も同様に学生のケアは万全の状況にある。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

本事業実施により得られた研究教育成果は、学会発表や論文発表により内容が公開され、成果の普及に努めている。

■ グッドプラクティス等

MSUからの2018年度長期受入学生は、帰国後も本学教員による継続的な研究教育指導により研究教育成果を生み出し、研究内容をまとめ上げ、本学とMSUの共著論文として査読付き学術雑誌に投稿し“Antibiotics”(第10巻489ページ、2021年、インパクトファクター4.6)に掲載された。

MEPHIとは本事業をきっかけに、2019年度日本政府とロシア政府による「国際協力型廃炉研究プログラム」に、本事業の連携部門と共同で応募し採択され、成功裏の内に共同研究を終えた。さらにその実績が高く評価され、2021年度に再度公募された同プログラムに再び採択され、共同研究を継続している。また同プログラムに新規にサンクトペテルブルグ大学と別テーマの内容で共同で応募し採択され、共同研究を開始した。このように本事業活動をベースに大学間連携が深化し、ロシアの他のトップ大学との交流も着実に推進されている。